

「遺愛」という名前をつけたのは誰？

10月11日（木）に突然、電話がかかってきて、「愛媛に住む遺愛旧52回卒業の西川ですが、創基140周年の時に野田義成理事長先生が式辞で話されていた内藤鳴雪に関する資料は遺愛にありますか？」との問い合わせでした。西川さんは現在92歳、愛媛に住んでおられ、愛媛は内藤鳴雪の出身地だそうです。遺愛75周年史、遺愛100周年史によると、女学校として創立された時には、遺愛はキャロライン・ライト・メモリアルスクールという名称でしたが、外国名が当時の人々には馴染が薄かったので宇野兼三（かねみつ）教頭が兄の内藤鳴雪に頼んだところ、日本名として「遺愛」と名付けてくれたそうです。

鳴雪は、伊予（いよ）松山藩士の子。文部省参事官をへて旧藩主設立の常盤会（ときわかい）寄宿舎監督になり、舎生の正岡子規にまなび、子規没後も日本派の長老として活躍し、大正15年2月20日に80歳で死去されました。



内藤鳴雪

鳴雪は、遺愛という言葉は漢籍「春秋」左氏伝からとったそうです。

西川さんが期待する資料はありませんでしたが、75周年史で内藤鳴雪について触れている部分をすぐにコピーして送りましたら、折り返しすぐに岩波文庫の『内藤鳴雪自叙伝』の抜粋、鳴雪について書かれている『伊予の俳人たち』という本、そして松山にある鳴雪ゆかりの石碑の写真を送って下さいました。

驚いたことに1週間後の18日（木）に遺愛宮城県支部同窓会に愛媛から出席すること。遺愛時代の親友の貝森さんが出席するので、久しぶりに旧交をあたためたいとのことでした。

92歳のお二人が参加することになった同窓会に私も参加しましたが、とてもあたたかく、楽しいひと時でした。お二人は来年4月20日に行われる遺愛創基145周年式典・大同窓会での93歳の再会を誓っていました。

2018年10月20日（土）



前列左から貝森さん、西川さん



宇野兼三教頭